

# うたとかたりの対人援助学

## 第5回 シリア人留学生の祈り

鵜野 祐介

### シリア人留学生ナーヘドさん

昨年(2017)の暮れ、シリア人留学生ナーヘド・アルメリさんに、シリアの子守唄やわらべ唄についてお話を伺う機会を持った。ナーヘドさんは1987年に首都ダマスカスの北約160kmのシリア西部の町ホムスに生まれ、ダマスカス大学日本語学科を卒業後、2011年9月に来日し、現在は筑波大学大学院博士後期課程で童謡詩人・金子みすゞの研究に取り組んでいる。漫画やアニメへの関心から日本語学科に入学する学生が多い中、「遠く離れた場所のことを学びたい」という目的で、この学科を選んだという。「そんな動機の学生は私一人でした」と微笑む好奇心と冒険心にあふれた彼女は、色白で涼やかな顔立ちの女性である。

### シリアは砂漠の国ではない

2016年11月の日本児童文学学会年次大会(日本女子大学)ではじめてお会いして以来、何度かお話する機会があったが、今回、日本子守唄協会の機関誌に連載している「世界子守唄紀行」でシリアの子守唄を取り上げようと、ナーヘドさんに取材させていただくことになった。

彼女が来日した2011年9月の半年前に始まったシリア内戦は、その後絶望的な泥沼化をたどり、今日も続いていることは周知の通りだが、私自身「紛争の国」という以外のこの国に対す

るイメージは、かつてティグリス・ユーフラテス川流域にメソポタミア文明が栄えた後、「月の沙漠をはるばると…」というものだった。

だが、そのことをナーヘドさんに話したところ、「皆さん、そんなふうに思っておられますが、東部の方を除けばシリアには砂漠はありません」とのことだった。インターネットで検索してみると確かに、「国土の内、西部の地中海沿岸部には平野が広がっており、南部は肥沃な土地が広がっており、国内農業のほとんどを負担している」(ウィキペディア)。また、彼女の生まれた町ホムスの紹介サイトには、緑豊かな「かつての」町の写真が載っていた。

ところが、同じサイトには空爆で破壊し尽された現在のこの町の写真も紹介されていた。おそらく私は、その白々としたコンクリートの残骸に、白い砂漠のイメージを重ね合わせて、「砂漠の国」という幻像を勝手に作り上げていたのだろう。

### 3つの子守唄

ナーヘドさんは3つの子守唄を歌ってくれた。3曲ともアラビア語の方言である(日本語訳はナーヘドさんの下訳を筆者が補筆したもの)。

「神様 愛する人を私のもとへ」  
ああ ロザナよ

あなたの中に 全ての幸運がある  
ロザナよ あなたの行いに対して  
神様の報いがありますように

ロザナに乗って アレッポに向かう人たちよ  
あなたたちの中に 私の愛する人もいる  
あなたたちは ブドウを運んでいる  
ブドウの下には リンゴを積んでいる

まわりの人たちは 愛する人と一緒なのに  
私の愛する人は ここにはいない  
ああ 神様 私の愛する人を  
風とともに 私のもとへ届けてください

——「ロザナ」はシリア北部の町アレッポとレバノンの港との間を運航した輸送船の名前で、第一次世界大戦中、オスマン帝国が自国の安いブドウやリンゴをレバノンの市民に売り、レバノンの商人や農民に打撃を与えた。それを見かねたアレッポの商人たちがロザナをレバノンに送ってこれらを買取り、彼らを救ったという歴史の出来事に基づいているという。

離れて暮らす愛しい人のことを想い、自分のもとに戻ってくることを祈る恋歌である。以前の回に紹介したように、英国スコットランドにも「今夜私は眠れない／大切なあの人帰ってこないから」と歌われる子守唄があるが、民族や時代を問わず、歌い手のやるせない想いの受け皿となってきたのが、幼な児のつぶらな瞳なのだろう。今、戦火の中でもこの子守唄の歌声は、風と共に、愛する人のもとへ届けられているだろうか。

続く2曲の「アンズ」と「鳩」は、いずれも寢た子へのご褒美を約束する子守唄で、世界の子守唄の定番モチーフである。日本であればお

餅や赤飯、スコットランドではウサギの毛皮やミルクが待っているのと同じである。

「アンズの実を摘もう」  
ティティチ ティティチ  
アンズの実が アンズの木に成っている  
風が吹いたら  
ヌーラに アンズの実を摘んであげよう

——「ティティチ」は、特に意味のない、リズムを作るための言葉で、英語では「ジングル」と呼ばれる。ナーヘドさんによると、シリアの民家の庭には大抵、アンズやイチジクやブドウなどの果樹が植えてあったそうで、その実を寢た子（ヌーラちゃん）へのご褒美にあげるというのも、ごく自然なやりとりといえる。

「鳩をあぶって ヌーラにあげよう」  
ねんね ねんね 寝てくれたなら  
鳩をあぶって ヌーラにあげよう  
鳩さん そんなことはしないからね  
ヌーラが寝てくれるように  
ウソをついてるだけだから

——「鳩のあぶり焼き」はちょっと残酷で、そのせいか、「鳩さん、そんなことはしないからね」と付け足しがされている。実際には、鳩が食用とされることはそんなに多くないそうで、ドキッとするような残酷さもまた、世界の子守唄の定番である。ちなみに、日本の「ねんねんころりよ」や「おろろんばい」にあたるシリアのあやし言葉は「ヤッラ トゥナーム」だそうである。

#### まりつき唄

シリアの子どもたちはどんなことをして遊んでいたかということ、ボール遊びでは、女の子は

まりつき、男の子はサッカー。それから鬼ごっこは男女一緒に遊んでいたという。こんなまりつき唄もあったそうだ。

「私はいい子」  
私はいい子  
父さんと母さんのことが大好き  
まりつきが上手  
これ全部 ウソじゃないよ

——いかに、少し大人ぶった女の子がすました顔で言いそうなセリフである。

#### 小学校の教科書に載っているうた

以上4曲は、ナーヘドさんが生まれ育ったホムス周辺の地域で伝承された子守唄や遊び唄で、歌詞はアラビア語のホムス地域の方言だという。シリアでは、アラビア語の文字はコーランを記した神聖なものであるため、方言を文字として記録することはタブーとされていたそうで、方言で歌われる子守唄やわらべ唄、また方言で語られる昔話や世間話の類いは記録されてこなかったそうだ。

これに対して、歌詞が記されている子どものうたは、標準語のアラビア語で作られた、学校の教科書に載っている歌で、今回ナーヘドさんはその中から「兎」と「お母さん」を歌ってくれた。シリアの子どもはみんな知っている歌だという。

「兎」(スレマーン・ルイーサ作詞)  
兎が何かにおどろいて跳ねた  
私は隣で遊んでいた  
光のように白い兎  
果樹園を走り回る  
稲妻のようにジグザグと

緑の葉っぱを探しているのか  
波のように柔らかい兎の綿毛が  
緑の草の上にふわふわ浮んでいる  
私から逃げないで  
兎さん あなたは私の友だち  
一緒に遊びましょう

「お母さん」(スレマーン・ルイーサ作詞)  
お母さん あなたは私のいのちの鼓動  
愛のしずくで 私の心を満たしてくれる  
お母さん あなたは私のうた  
あなたの祝福は 私の祝福  
あなたの微笑みは 私をそっと支えてくれる  
私は家の中で 飼われている小鳥  
お母さん あなたのキスは  
私の一日に 光を与えてくれる  
朝 私が目覚めると  
お母さんは 私の髪を撫でている  
お母さんのことが 私は大好き  
お母さん あなたのために尽くします

——いずれも、日本で百年前に創刊された『赤い鳥』に登場しそうな、動物への呼びかけや母親への思慕をモチーフとしている。ナーヘドさんが金子みすゞ研究に取り組むことになった淵源はこのあたりにあるのかもしれない。

ただし、標準語で歌われ、文字として記録されているこれら2曲の歌詞は、少し忘れてしまっていたのでネットで確認しなければならなかったとナーヘドさんは笑った。一方、方言で歌う最初の4曲は、文字として記録されていないためか、頭にしっかりと残っていたそうだ。

#### 山本美香さんと「大きなくりの木の下で」

シリアと言えは思い出されるのが、2012年8月に北部の町アレッポで取材中、戦闘に巻き込

まれ凶弾に倒れたジャーナリストの山本美香さんである。山本さんの追悼本『山本美香という生き方』(新潮社 2014)に、わらべ唄にまつわる次のようなエピソードが記されている。

1990年代、彼女が初めて紛争地での取材をアフガニスタンで行なった時のこと。ある民家を訪れて、赤ちゃんを抱いた母親から話を聞こうとすると、突然現れた異国からの訪問者に母親は警戒していた。その時、山本さんはとっさに思いついて、「大きなくりの木の下で」を日本語で歌い始めた(身ぶりつきだったかもしれない)。すると母親はたちまち表情を崩し、笑い声を上げた。それから、赤ちゃんをあやしなから一緒に歌ったという。

おそらくそれ以来、山本さんは行く先々の紛争地で、また支援をおこなった東日本大震災の被災地でも、折に触れてこの「大きなくりの木の下で」を歌ったにちがいない。わらべ唄が民族や言葉の壁を越えて、人と人の心をつなぎ合わせる力を持っていることを、彼女は実証してみせたと言えるだろう。

#### 石なご遊びの国際性

私の恩師、故藤本浩之輔先生が63歳で亡くなられる前の数年間、特に情熱を注がれたのが「石なご遊び」と呼ばれる、石や骨などで行うお手玉遊びの国際比較研究だった。日本国内各地はもとより、中国、ブルガリア、トルコ、ギリシアなどにも足を運ばれた。

トルコのアナトリア文明博物館では、紀元前7000年～5500年頃の出土品に遊具か占具に用いられたと思われる羊の距骨があることや、紀元前1200年～700年頃のレリーフに骨お手玉をしている場面があることを発見され、また現在も当地の子どもたちが石を使ってこの遊びをしていることを確認された。

「お手玉遊びは、世界にもっとも広く分布している遊びの一つであると言えよう。(中略)分布の世界性においても、伝承の歴史性においても、屈指の人類文化、すなわち、世界的無形文化財だと言ってよいと思う。注目すべきは、それだけの伝播・普及や伝承が、間違いなく子どもたちの力に負っているということである」(藤本『遊び文化の探求』久山社 2001:34頁)。

#### 「世界子ども文化フェスタ」をシリアで

シリアは、藤本先生が訪れたトルコの南に隣接する国である。そう思って、この石なご遊びを知っているかどうか、ナーヘドさんに尋ねてみた。するとやはり、シリアでも女の子の遊びとして5個の石を使ってやっていたという。

私自身が子どもの頃、岡山県北部の田舎町で「ごいし(五石)」と呼んでいた石なご遊びのやり方をナーヘドさんに説明すると、「おんなじです！」と答えてくれた。シリアの子どもと日本の(しかも中国山地の片田舎の!)子どもが、同じ遊びを同じ材料(石)、同じルールでやっていたとは、なんと愉快的話だろう。

いつかシリアの地から戦火や銃声が消えた時、祖国に戻ったナーヘドさんたちが中心となって、世界の子どもたちが集まり、わらべ唄や遊びを一緒に歌い遊ぶ「世界子ども文化フェスタ」をこの地で開いてもらうことを提案したい。

「6年前の来日後、一度だけ、2年前に帰国しました。その時に見た光景は、テレビやインターネットを通して想像していたイメージをはるかに超えていて、言葉を失いました」。こう語るナーヘドさんの、祖国シリアの平和への祈りが、いつか叶えられますように。そしてまた、「世界子ども文化フェスタ」が実現する日がいつかきっと訪れますように。